農業委員会だより

■発行人　飯山市農業委員会会長　松永晋一
■編　集　飯山市農業委員会　情報委員会

農業委員・地域担い手農業者懇談会開催

2月27日飯山市役所において、各地域で米・キノコ・野菜・果樹・花卉・乳牛等の生産に関わり活躍している担い手農業者19名が参加し開催されました。

参加者は農業生産法人として経営を確立している方から、Iターンで就農1年目の方まで、それぞれの生産物や経験規模も違う中でいくつかの共通課題が出されました。

①後継者・人手不足について
・後継者もおり、今のところ人手も足りているが、高齢化や周りの人達をみると今後（5～10年）が心配だ。
・若い人も就労してくれるが、仕事が辛くて辞めてしまう人もいる。
・若い人の中には、自分の家の田畑の場所さえ知らない、水源にも関心がない人がいる。水路農道の管理や村の維持にも影響があるのではないか。
・通年雇用の難しさ、農閑期の仕事の確保。

②収入について
・生産物の値段が安い。
・生産調整ですべての圃場で主食用の米が作れない。
・作っても高い米は売れないし、供給過剰で値崩れが心配。
・収入が増えず、今ある施設や機械を更新できない。
・安い農機具を見つけても修理代がかかりうまくいかない。
・キノコの今ある施設をうまく利用して、お金になる何かを生産できないか。

③情報について
・新規就農で、生産や販売方法・方式の情報が欲しい。
・行政などの補助、支援について柔軟に対応して欲しい。
・良い農産物を作っているが売り方が上手でない。

その他にも鳥獣被害や品質管理等の問題が出されています。以上の課題はそれぞれに関連していますが。うまく情報を発信し、その情報を多くの人に理解、利用してもらえれば飯山市の農業も儲かるやりがいのあるものになると思います。

そんな中で新幹線の開業が現実となり、人や物の流れが期待されています。農業にプラスになるよう、生産者・経済団体・行政・地域住民がそれぞれの立場で知恵を出し、実践していく必要がありま す。

追伸　懇談会の後、懇親会を行いました。その場では生産者みなさんの自分の仕事に対しての「誇り」「やりがい」「夢」が多く語られました。今後に大いに期待できる懇談（親）会でありました。

（農業委員　小嶋）

「遊休農地活用シンポジウム」開催

平成25年2月4日長野市にて遊休農地の発生防止と有効活用をめざし、長野県・長野県農業会議などの主催で開催され、飯山市農業委員会も参加しました。

主催者挨拶の中で長野県農政部長より「遊休農地の解消には個々の農家の力だけでは難しいので皆さんで連携する必要がある。県は単年度の解消目標を600㌶以上としている。」と挨拶がありました。

事例発表として新規参入・地域を挙げて、遊休農地でソバ栽培をしている2団体より発表がありました。

その後のパネルディスカッションで各団体より

①関係機関との信頼関係が必要だが、それには自分たちの地域は自分たちで守るとの意気込みが必要。それにより周りも動く。

②成果が上がっているところは、農業と「6次産業」又は「地域のコミュニティーの活性化」など、何か1つを結び付けている。

③ボランティアだけではだめであり、収益につなげる努力が必要。それが事業の継続性に繋がる。

など出されました。

どの団体も継続及び発展に努力しており、収益の確保のため農産物はそのまま販売するのではなく付加価値をつけて販売する努力を行っています。

また、遊休農地対策は地域を挙げての取り組みが必要であり、それはボランティアだけでなく、収益につなげる努力が必要。それにより事業の継続性に繋がり、地域が元気になるとのことでした。

現在、飯山市では人・農地プランの作成を行っています。高齢化等の中、将来を見据え地域農業の在り方を考えていくことが必要になっています。

飯山市農地利用集積円滑化団体（JA北信州みゆき）が遊休地解消で受賞

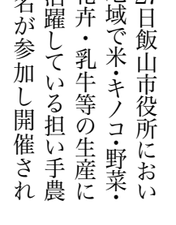
このシンポジウムでは、遊休農地の解消等の取組に対し表彰が行なわれており、今回は、飯山市農地利用集積円滑化団体が長野県農業再生協議会会長を受賞しました。

集積円滑化団体とは、担い手となる農家に農地を集積する仲立ちを行っています。今回の表彰の対象となった活動は、常盤地区堤外の耕作放棄された農地を3つの農業経営体に集積し、各経営体が耕作を再開することで約20㌶が放棄地解消につながりましたが、その集積・解消に決定的な役割を果たした、というものです。

今後も、遊休農地の発生防止・解消に向けて、農地の集積を円滑に行う重要性が増しており、益々の活躍が期待されます。

あぜ道だより

「里山の荒廃について」



瑞穂地区農業委員
小林喜代春

昨年秋、農業委員の仕事として、地区内の耕作放棄地の調査に行く事となり、全く知らない山間の農地を調査して歩いた。生活の場は平地であり、四季を通じてみる里山は、それ程の変化もなく毎年変わらぬように見えていたのだが、あらためて現地に行ってみると、農道は荒れ、かつては水田、或いは畑として、近隣の農家が耕作していたと思われる痕跡はあるもの、現状は原野としか呼べない状態が、近隣の里山の大部分を占めていた。

NHKのテレビ番組でも「日本の里山」がシリーズとなって放映され、各地の美しい里山が紹介されているが、その中に、一旦は荒廃し、原野となりつつあったものを、人々の手により、かつての美しい環境と景観を取り戻し、再び里山となった場所が多く見かけられた。

里山とは、森林と、農村との中間に位置する空間をさし、人間の手によって作られた自然環境であり、日本人にとっては親しみやすく、心の故郷とも言える場所でもあり、動植物の生態にとって、住みやすく貴重な場所でもある。

里山は、40年ほど前から急に人がいなくなり、その結果、草木が茂った「やぶ」になり、場所によってはゴミ捨て場となったり、かつては子供の遊び場、地域に住んでいる人達の憩いの場だったのに、今は誰も寄りつかなくなってしまった。

稲作に取っても欠かせない水源は、ほとんどが、里山と呼ばれる場所から湧き出る清水を、平地まで水路で引き利用しているが、今、その水源である里山が、荒れ、美味しい米を育てる清水さえ、失われつつある。これからの米作りにも、有害鳥獣の被害を減らすにも、里山の保全は大切な地域の課題でもある。日本の原風景が少しずつ無くなっていることに、一抹の不安を感じた。

TPP交渉参加を表明した安倍総理、自民党政権の今後の農業政策はどんな方向に向かうのか解らないが、日本の原風景を守り、維持する地道な活動にも目を向けて欲しい物である。

現在、行政、JA、が一体となって、地域農業再生の為、地域農業を活用し、地区活性化を図る事を目指し、国で進めている「人、農地プラン」を活用すべく、地域に根ざしたプランを作成中です。

農業に携わる人は勿論ですが、この地域に暮らす全ての人々が、今後の地域の在り方、そして里山の再生について、真剣に考え、意見を出し合い、住みよい地域づくりの為、「知恵」と「ずく」を出して欲しいと願っております。

農地相談のご案内

市役所農業委員会事務局☎ 62-3111(261)

農地の売買，賃借、転用等農地に関することで相談したい方は、お気軽にお出かけください。

□日時　3月21日（木）
　　午前9時～12時・午後1時～3時
□場所　飯山市役所4階　　第2委員会室

あしあと

（1・2月の活動記録）

1/24　農業委員会活動活性化ｾﾐﾅｰ
　28　1月農業委員会総会
2/ 4　遊休農地活用シンポジウム
　18　北信州農業委員会研修会
　19　長野県女性農業委員の会研修会
　27　2月農業委員会総会
　〃　担い手農業者との懇談会